

播州歌舞伎を通じた児童の主体的な学びに関する縦断的研究

A Longitudinal Study on the Independent Learning of Children Through HARIMA State Kabuki

小林 小夜子* 田中 悠 菜**
KOBAYASHI Sayoko TANAKA Haruna

A 小学校の播州歌舞伎クラブにおいて、指導者である師匠が教育目標としている内容を児童に強制的に教えずとも、児童が主体的にそれを学び取ることができていたかどうかを明らかにすることを目的とした。方法としてX年度小学3年生からX+7年度小学6年生に至るまでの順次の学年末に書いた51人分の作文を分析対象とした。本研究では主体的学びを「自らに師匠の教育目標を学び取り、作文の文章中に書きあらわした状態」と独自に設定した。師匠が指導をする際に教育目標としていた4項目に関する児童の学び取りを捉えるために、児童の作文中に現れた師匠の教育目標に該当する文を1文ずつ抽出し、得点化した。また、児童の作文の文章を全体的および客観的に分析するために、計量テキスト分析を用いた。その結果、主体的学びができていた児童は「『人』という他者を『見る』こと」つまり「他者を意識する」ということが関与していた。本研究において見出された播州歌舞伎のよさ、魅力は「人を見て、自ら学ぶ」ということであった。

キーワード：主体的学び、播州歌舞伎、作文分析

問題と目的

文部科学省が平成21(2009)年6月に行った「子どもの徳育に関する懇談会」の資料「2. 現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題」において「現代の日本の若者・子どもたちには、他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、生命尊重・人権尊重の心、正義感や遵法精神の低下や、基本的な生活習慣の乱れ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下などの傾向が指摘されている。」と述べている。また「3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題 (2)学童期」においては、小学校高学年の時期における子どもの発達において、重視すべき課題として「抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解」、「自己肯定感の育成」、「自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養」、「集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成」、「体験活動の実施など実社会への興味・関心をもつきっかけづくり」の5つを挙げている。以上のことから、現代の児童には、他者を意識し、尊重しながら集団の中で生きていく力が不足していると考えられる。また、発達段階の学童期にある児童には、他者との協力や、自分の役割を認識して集団で生きていく力が必要とされているのが現代の社会であると言えるだろう。

経済産業省(2006)は、「社会人基礎力」が現代の子どもたちには必要であると述べている。「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力から構成されており、経済産業省はこれを「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と解説している(表1参照)。さらに、「企業や若者を取り巻く環境変化により」、「基礎

学力』『専門知識』に加え、それらをうまく活用していくための『社会人基礎力』を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきています。」と指摘している。

現在、学校教育においては児童の「社会人基礎力」や「人間力」などを高めるために「キャリア教育」という形で様々な取り組みが行われている。キャリア教育とは、中央教育審議会(2011)により「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。

このようなことから、現代の児童には、他者と協力しながら何かを成し遂げるという経験が必要になってきていると考えた。そして、児童が他者と協力して何かを成し遂げることによって、他者を思いやる心や主体性が身についていくのではないかと考えた。

一方、教育基本法の第2条5に、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とあるように、今一度、日本の伝統を見直し、児童の教育に取り入れようとする動きがある。その動きには、地域ごとに伝統に関する事例を掲載した教科書を作る取り組みや、学校ごとにその地域の伝統文化に詳しいゲストティーチャーを招いて授業を行ってもらったり取り組みなど、地域に根差した伝統文化教育が展開されているようだ。このような地域に根差した伝統文化教育の1つとして、兵庫県播州地方には「播州歌舞伎」(吉田, 1990)がある。

この播州歌舞伎については、兵庫県版道徳教育副読本

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻学校心理・学校健康教育・発達支援コース 教授 **多可町立杉原谷小学校

「心かがやく」(兵庫県教育委員会, 2011)に「洋子の播州歌舞伎―伝統の若き継承者―」として取り上げられている。兵庫県版道徳副読本は「兵庫ゆかりの人物を取り上げるなど地域の特性を生かし、子どもたちの興味や関心を高めながら、郷土に誇りを持ち、人と人とのつながりや社会の中での自己の責任や義務、役割を自覚するなど、自己の生き方のよりどころとなるような心に響く魅力ある副読本を作成し、新学習指導要領を踏まえ、学校、家庭、地域が連携して進める兵庫の道徳教育のさらなる充実を図る。」という趣旨のもと作成されたものである(兵庫県教育委員会, 2011)。この教材では、伝統文化の若き継承者として、ひたむきにそして懸命に播州歌舞伎に打ち込む若者たちの姿が描かれており、主人公は「責任感」・「郷土愛」・「他人を思いやる心」などを、播州歌舞伎の継承活動を通して学び取っていることが読み取れる。この物語のモデルはA小学校の播州歌舞伎クラブの卒業生であり、A小学校の播州歌舞伎クラブは、発足以来その伝統を守り続けてきている。このクラブは学校独自のクラブ活動として設定されており、所属している児童は希望者のみで、週に1回、1時間半程度の練習を行っている。このA小学校の播州歌舞伎クラブを指導されていた師匠は、3歳の時に初舞台を踏んで以来、85歳で亡くなられるまでの82年間、播州歌舞伎とともに生きてこられたプロの役者である。

「師匠の教育目標」は、「中町 子ども歌舞伎クラブ育成会 <15年間のあゆみ>」(2003)の中の「歌舞伎を通じて子どもたちに学んでほしいこと」の中で師匠が

話されているものである。それらは、「①礼儀正しい子に、あいさつがよくできる子になってほしい。②堂々と人の前で意見が言える子になってほしい。③協力して、1つのことを成し遂げることの喜びを知ってほしい。」の3項目である。また「播州歌舞伎クラブ10周年記念文集」(1998)の中で「歌舞伎というものを何か特別なものと考えてではなく、また他にも神楽やその他の芸能があるように、人々の生活の中から生まれ育ってきたものであるから、少しでも伝統芸能というものを理解してもらったらありがたい。」と話されていたことから、「④ふるさとを愛し、伝統文化を大切にする子になってほしい。」という項目を加えた4項目を本研究における「師匠の教育目標」として設定した。

この師匠の教育目標は、先述の「社会人基礎力」の内容を学び取ることと関連があると考えた。そこで、師匠が児童を指導される際に大切にされてきた「師匠の教育目標」と、現代の社会において、社会を形成する一員として必要とされている「社会人基礎力」との関連について筆者らが独自に考え、表2に示した。

A小学校の播州歌舞伎クラブの指導者であった師匠は、「SUNSUN あさひ(朝日新聞社, 2009)」の取材のなかで「生粋の播州歌舞伎役者は、今では私一人になりました。何十年もかかって先輩から学んだことを、たとえ一つでも二つでも子どもたちに伝えたい。幻にしたくないんです。」と述べている。このようなことから、師匠は児童に対して「指導」をするというよりも「伝える」ということを大切にされていたのではないかと考えた。ま

表1 社会人基礎力<3つの能力/12の能力要素>

前に踏み出す力(アクション)	主体性 働きかけ力 実行力	物事に進んで取り組む力 他人に働きかけ巻き込む力 目的を設定し確実に実行する力
考え抜く力(シンキング)	課題発見力 計画力 創造力 発信力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 新しい価値を生み出す力 自分の意見をわかりやすく伝える力
チームワークで働く力(チームワーク)	傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレスコントロール力	相手の意見を丁寧に聴く力 意見の違いや立場の違いを理解する力 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 社会のルールや人との約束を守る力 ストレスの発生源に対応する力

注) 経済産業省(2006)「社会人基礎力」とは を参考に筆者が作成。

表2 師匠の教育目標と社会人基礎力との関連について

師匠の教育目標	身につくと考えられる社会人基礎力
①礼儀正しい子に、あいさつがよくできる子になってほしい。	働きかけ力 傾聴力
②堂々と人の前で意見が言える子になってほしい。	働きかけ力 実行力 発信力
③協力して、1つのことを成し遂げることの喜びを知ってほしい。	働きかけ力 創造力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性
④ふるさとを愛し、伝統文化を大切にする子になってほしい。	創造力 状況把握力

た、「播州歌舞伎クラブ10周年記念文集」の中の播州歌舞伎クラブを担当されていた先生の話として、「師匠の指導は実に考えさせられることが多い。というのは実に上手なのである。決して怒らない。だが、子どもたちはしっかりと覚えていっている。」とあることから、子どもたちを怒って強制的に覚えさせるのではなく、「伝えたい」という強い思いを持って児童と向き合うことによって、児童には歌舞伎や師匠の思いが伝わっていったのだと考えた。

この師匠の教育目標を副読本の中の主人公が自ら学ぶ取ることによって、「社会人基礎力」と共通する「主体性」や「他人を思いやる心」を身につけたと考えられたため、実際に播州歌舞伎クラブに所属している児童も同じように成長しているのではないかと推測された。

そこで本研究では、A小学校の播州歌舞伎クラブにおいて、師匠が指導をする際に教育目標としていた内容を児童に強制的に教えずとも、児童が主体的にそれを学び取ることができていたかどうかを明らかにすることを主たる目的とする。加えて、師匠の教育目標を児童がどのように主体的に学んだかを同時に検討していくことを目的とする。

方法

1. 研究対象

A小学校の播州歌舞伎クラブに所属していた51人の児童（平成X年度から平成X+7年度の8年間にクラブに在籍）が小学3年生から6年生までに、毎年年度末に書いた作文を対象とした（女子：41人、男子：10人）。平成X年度に3年生だった10人を1期生、平成X+1年度に3年生だった7人を2期生、平成X+2年度に3年生だった10人を3期生、平成X+3年度に3年生だった15人を4期生、平成X+4年度に3年生だった9人を5期生とした、計51人分の3年生から6年生までの作文であった。各期生で使用した作文の年度と児童数を表3に示した。

表3 使用した作文の年度と児童数について

	3年生	4年生	5年生	6年生
平成X年度	1期生 (10人)			
平成X+1年度	2期生 (7人)	1期生 (10人)		
平成X+2年度	3期生 (10人)	2期生 (7人)	1期生 (10人)	
平成X+3年度	4期生 (15人)	3期生 (10人)	2期生 (7人)	1期生 (10人)
平成X+4年度	5期生 (9人)	4期生 (15人)	3期生 (10人)	2期生 (7人)
平成X+5年度		5期生 (9人)	4期生 (15人)	3期生 (10人)
平成X+6年度			5期生 (9人)	4期生 (15人)
平成X+7年度				5期生 (9人)

計51名

2. 研究倫理

播州歌舞伎の継承活動に長年力を注いでいるA小学校並びに、師匠から許諾をいただき本研究への協力を得た。

3. 主体的学びの定義

本研究では主体的学びを「自らに師匠の教育目標を学び取り、作文の文章中に書きあらわした状態」と独自に設定した。

4. 分析方法

師匠が指導をする際に教育目標としていた4項目に関する児童の学び取りを捉えるために、児童の作文中に現れた師匠の教育目標に該当する文を1文ずつ抽出した。抽出方法は手作業で行い、著者のうちの一人が主に行い、それを基に、残りの著者および関連の大学院生2人の合計4人が師匠の教育目標と関連があると判断したものを教育目標に該当したと判断した。また、児童の作文の文章を全体的および客観的に分析するために、テキスト分析ソフト KH Coder（樋口、2015）を使用した。

結果

1. 結果の整理

師匠の教育目標に関する表現が書かれた文章1文につき、1点を与えた。また、舞台に立った回数について、1回につき1点を与えた。各個人は、学年における得点および4年間の合計である合計得点で示された。

今回 KH Coder の分析方法のうち「抽出語150」と「共起ネットワーク」を使用した。「抽出語150」とは、KH Coder が抽出した単語の中で出現した回数が多い順に150語を表にしたものである。次に「共起ネットワーク」とは、抽出した語の出現パターンが似たものをグループ化し、線で結んで図にしたものである。またピンク色で表している語は、出現する単語の中で中心になって出現しているものを表している。樋口（2015）によれば「水色・白・ピンクの順に中心性が高くなることを示す。」とあることから、本研究では、水色を中心性がやや高い語、白色を中心性が高い語、ピンクをかなり高い語として分析をした。また同時に樋口（2015）は共起ネットワークの分析に関して、「単に語がお互いに近くに布置されているというだけでは、それらの語の間に強い共起関係があることを意味しない。重要なのは線で結ばれているかどうかであって、近くに布置されているだけで線で結ばれていなければ、強い共起関係にはない点に注意が必要である」と述べていることに注意して分析をした。抽出語150にあがっていても、共起関係がみられない語は共起ネットワークの図に書かれていないことがある。

また KH Coder で分析を行う際、播州歌舞伎に関連する語を強制的に抽出する語、今回の分析には必要のない個人名及びそれに付随する語は強制的に抽出しない語に設定して分析をした。KH Coder で分析を行うにあたって、上記のように前処理を行った結果、各ファイルに対して、「総抽出語数」と「異なり語数」というものが出てきた。樋口（2015）は「メイン画面に表示されている

『総抽出語数』とは、分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数であり、『異なり語数』とは何種類の語が含まれているかを示す数である。この部分のカッコ内の数値は、分析の対象としてKH Coderが認識している語の数を示している。特に設定を変更しない限り、助詞や助動詞のように、どのような文章にでもあらわれる一般的な語は分析から除外される。そうした語を除いて、語の延べ数や種類数をカウントした値が『(使用)』の箇所に表示されている。」と解説している。

2. 師匠の教育目標の内容と児童の学年との関連に関する変化

抽出した師匠の教育目標の文章、師匠の教育目標の項目ごとの合計得点と舞台経験回数の合計得点との関連の分析結果、KH Coderの前処理結果、KH Coderの抽出語150の分析結果、KH Coderの共起ネットワークによる分析結果の5つである。

抽出した師匠の教育目標の文章では、児童の書いた作文から抽出した1文をそのまま表に示している。抽出語150の分析結果においては、抽出した語が150語に満たなかったために、150語よりも少なくなっている。また、共起ネットワークの分析に関しては、分析の基準をそろえるために、最小出現数による語の取捨選択を「1」に設定し、描画数を「60」に設定して分析を行った。さらに、「強い共起関係ほど太い線で描画」と「出現数の多い語ほど大きい円で描画」という項目を選択して分析を行った。最小出現数による語の取捨選択とは、共起ネットワークの図に出現させる語を指定するための数字であり、今回のように「1」に設定した場合には、文章中に1度でも出現した語は共起ネットワークに表示することになる。また、使用語数というのは、今回の共起ネットワークで使用した語の数である。

1) ①礼儀正しい子に、あいさつがよくできる子になってほしい。

抽出した師匠の教育目標の文章 ①の項目の内容は表4に示すとおりであり、3年生では2つ、4年生では3つ、5年生では1つ、6年生では3つの文章表現があった。

①の項目と舞台経験回数との関連の分析結果

①の項目の4年間の合計得点と、舞台経験回数の4年間の合計得点の間には関連はみられなかった。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、①の項目の分析結果は図1に示すとおりであり、前処理結果(総抽出語数85, 異なり語数36), 使用語数は14であった。

2) ②堂々と人の前で意見が言える子になってほしい。

抽出した師匠の教育目標の文章 ②の項目の内容は表5に示すとおりであり、3年生、4年生、5年生において、②の項目に関する文章表現はみられなかったが、6年生では3つの文章表現があった。そして、ID 20の児童が2つの表現を書いていた。

表4 師匠の教育目標①の内容

ID	学年	本文
2	3	お師匠さん、先生方、教えてくれてありがとうございます。
2	3	これからもよろしくお願いします。
4	4	これからもよろしくお願いします。
17	4	頑張りますので、よろしくお願いします。
28	4	師匠さん、今年もよろしくお願いします。
28	5	これからもよろしくお願いします。
2	6	師匠、いままで本当にありがとうございますございました。
45	6	最初のあいさつでみんなの心を1つにします。
45	6	師匠・先生・先輩方ありがとうございますございました。

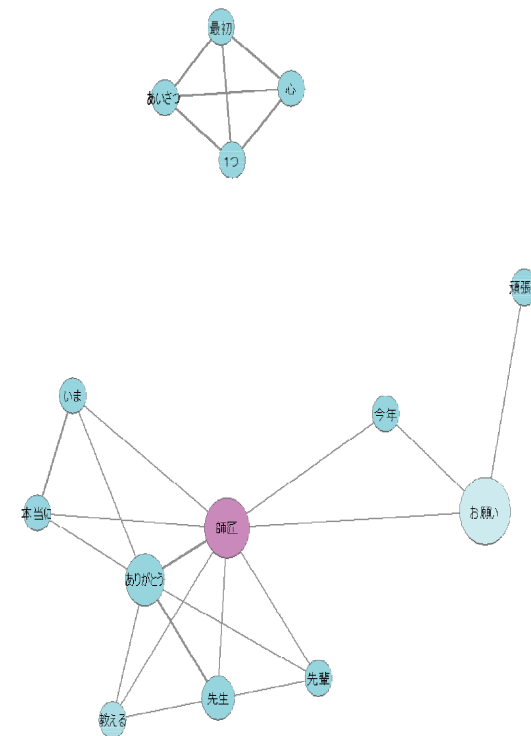


図1 KH Coderの共起ネットワークによる師匠の教育目標①の分析結果

②の項目と舞台経験回数との関連の分析結果

②の項目の4年間の合計得点と、舞台経験回数の4年間の合計得点の間には関連はみられなかった。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、②の項目の分析結果は図2に示すとおりであり、使用語数は8語であった。図2は中心性を示す白色ではなく透明で表示されており、中心となる語をソフトが分析できなかったときに出てくる図である。今回は分析にかけた文章数が少なかったこと、抽出した語が少なかったこと、抽出した語の出現回数がすべて1回と少なかったこと、書かれていた文章同士のつながりがみられなかったことなどにより、このような図になったと考えられる。樋口(2015)が「5から10程度のコードを扱う場合には、共起関係(edge)の描画数についても5から10程度にするか、あるいはJaccard係数を使った絞り込みを行うとよいだろう」と解説していることから、描画数を「10」、Jaccard係数を「0.2以上」に設定しそれぞれ分析を行ったが、どちらも図2と同様の結果になったため、本研究では図2を使用することとした。

表5 師匠の教育目標②の内容

ID	学年	本文
20	6	大きな声が出せるようになりました。
20	6	自分に自信が持てるようになりました。
46	6	歌舞伎で少し、はずかしがり屋じゃなくなりました。

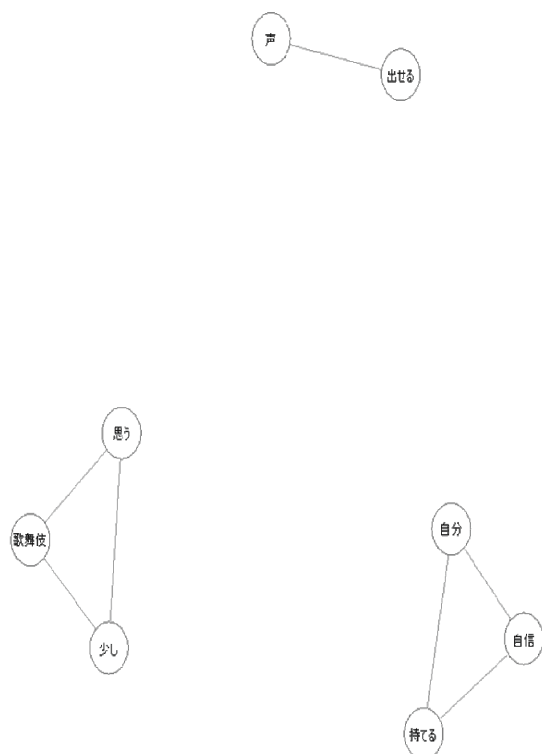


図2 KH Coder の共起ネットワークによる師匠の教育目標②の分析結果

3) ③協力して、1つのことを成し遂げることの喜びを知ってほしい。

抽出した師匠の教育目標の文章 ③の項目の内容は表6に示すとおりであり、3年生では6つ、4年生では2つ、5年生では1つ、6年生では17の文章表現があった。

③の項目と舞台経験回数との相関の分析結果

③の項目の4年間の合計得点と、舞台経験回数の4年間の合計得点の間には、 $r(51) = .316$ で低い(弱い)相関がみられた。

KH Coder の共起ネットワークによる分析結果

KH Coder の共起ネットワークによる、③の項目の分析は、中心性を示すために、出現回数が「1」の語を省いて、出現回数の多いもの同士の共起関係をみるために、最小出現回数による語の取捨選択を「2」に設定して、再び共起ネットワークによる分析を行った。その結果は図3に示すとおりであり、前処理結果(総抽出語数540, 異なり語数156), 使用語数は26であった。

4) ④ふるさとを愛し、伝統文化を大切にする子になってほしい。

抽出した師匠の教育目標の文章 ④の項目の内容は表7に示すとおりであり、3年生では3つ、4年生では7つ、5年生では4つ、6年生では5つの文章表現があった。ID 2, 8, 10の児童が2学年で登場していた。

④の項目と舞台経験回数との相関の分析結果

表6 師匠の教育目標③の内容

ID	学年	本文
18	3	どんどろ大師をやったみんなのチームワークがよかったから、大勢の人が泣いたり、笑ったり、拍手やお捻りが飛んできました。
18	3	みんなで力を合わせると、人を感動させることが出来るんだと思いました。
30	3	これからも、みんなと一緒に三味線を弾きたいです。
36	3	声の出し方とか大変だったけど、みんなで1つの舞台をするのは、すごく楽しかったです。
39	3	あとの3年間も頑張って、友達と一緒に楽しくやりたいと思います。
45	3	私はAちゃんとBちゃんと一緒に黒子をして楽しかったです。
46	3	初め、CちゃんとDちゃんと一緒に黒子をしていました。
2	4	5年生になっても、みんなで舞台上で立てるように頑張りたいと思います。
47	4	また、歌舞伎クラブに入っている4年生の友達と練習したいです。
23	5	歌舞伎は、人と協力し合っていることで、みんなが協力すればとてもいい歌舞伎が出来ると思うから、それに向かって頑張りたいです。
8	6	踊りと合わせて弾くと、リズムよくできて、とても楽しかったです。
18	6	でも、何回も何回も練習していくと、息も合ってきて、ベルディーホールの本番では、良い芝居ができました。
18	6	私は、芝居をやっている時、チームワークを思います。
18	6	どんな役でも、みんなの力を合わせると、すごいことが出来るのです。
18	6	このチームワークを活かして、6年生の最後の歌舞伎を頑張りたいと思います。
19	6	みんなで頑張った後はすごく嬉しいです。
22	6	それに私が一番最初に出るので、はっきり上手に言いたい、みんなが頑張っているんだから、自分も間違えずに言いたいと思いました。
23	6	でも、みんな頑張ったから、とってもいい歌舞伎が出来たと思います。
32	6	あと、お弓役のEちゃんとか、おつる役のFちゃんとか、みんなとても演技が上手かったです。
39	6	私たち三味線は、役者さんを支える、とても大切な役をしている、すごく大きな役をしていることが分かりました。
42	6	多可町芸能祭の時は、すごくみんな上手でした。
45	6	最初の声でみんなの心を1つにします。
45	6	お客様の拍手を聞くたび、(自分にじゃなくても)ひと安心して、頑張ることが出来ました。
46	6	ここをどういう風にしたらいいか話し合ったのが楽しかったです。
46	6	物の大切さや仲間とのチームワークを学びました。
47	6	友達3人で、話をしながらやるのが楽しかったです。
47	6	家来は、他の家来の子とかと少し仲良くなれたし、芸能祭でおもしろい化粧をしたりして楽しかったです。

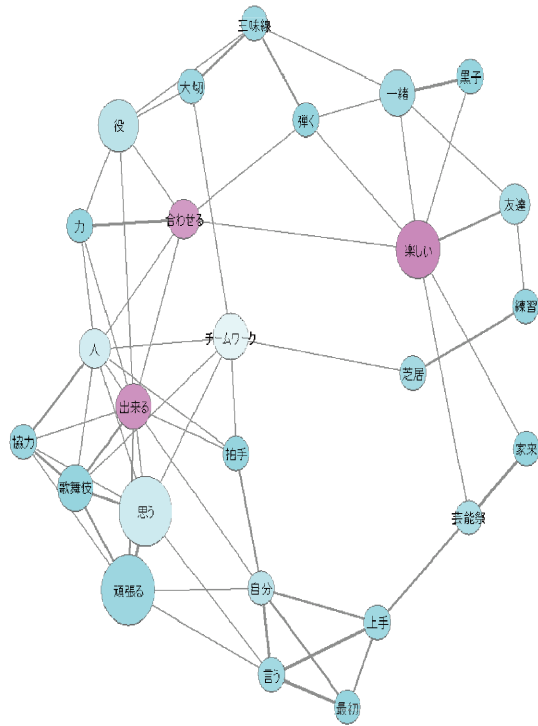


図3 KH Coderの共起ネットワークによる
師匠の教育目標③の分析結果
(最小出現回数[2])

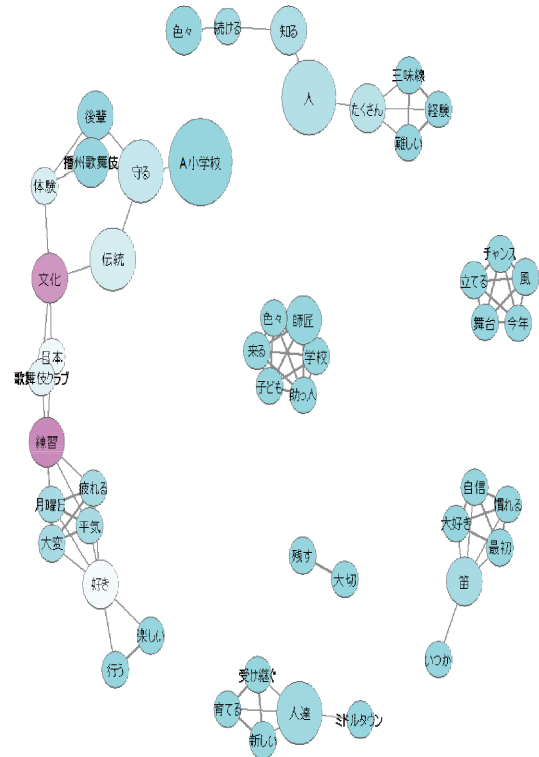


図4 KH Coderの共起ネットワークによる
師匠の教育目標④の分析結果

表7 師匠の教育目標④の内容

ID	学年	本文
13	3	僕は、何回も何回も行っているうちに、何をすればいいとかわかってきて、どんどん楽しくなってきた、好きになりました。
13	3	僕もいつか、入ってくる子に歌舞伎の笛を教えたいと思いました。
41	3	最初はあまり自信がなかったけど、やってみればおもしろかったし、笛も慣れてきて、歌舞伎が大好きになりました。
6	4	これからは、3年生に色々なことを教えていきます。
8	4	それに、たくさんの人に歌舞伎を知ってほしいし、歌舞伎を見てほしいです。
8	4	A小学校の歌舞伎を大切に残してほしいと思っています。
9	4	だから歌舞伎は、いつまでも、あってほしいと思います。
10	4	「やっぱり、歌舞伎は、おもしろいなあ」と思うことがあります。
36	4	いつも月曜日に練習しているから疲れて大変だけど、歌舞伎が好きだから、平気です。
48	4	歌舞伎クラブは日本の伝統文化の歌舞伎を練習するクラブです。
2	5	こういう風に、舞台上に立てるチャンスもあるので今年の3年生もいっぱい入ってほしいです。
8	5	三味線は難しいけど、たくさんの人に経験してもらいたいです。
10	5	6年生になっても歌舞伎を続けて、色々な人たちにも歌舞伎を知ってもらいたいです。
10	5	また、ミドルタウンの人達にも、1度だけでも歌舞伎を教えてあげたいです。
2	6	これからもずっとA小学校の歌舞伎があってほしいなと思っています。
5	6	5年生以下の人達、また新しく入った人達に、A小学校の伝統を受け継いでもらって守り育ててほしいと思います。
8	6	また、後輩の子にも、A小学校の伝統文化である播州歌舞伎を体験して、守り続けてほしいです。
39	6	師匠みたいに大きな人にならなくてもいいけど、たまに学校に来て、師匠の助っ人や子どもたちに色々教えられたらいいなと思いました。
49	6	これからも、後輩たちにA小学校の播州歌舞伎を守り続けて欲しいと思います。

④の項目の4年間の合計得点と、舞台経験回数の4年間の合計得点の間には相関はみられなかった。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、④の項目の分析結果は図4に示すとおりであった。使用語数は54であった。抽出語150の1, 2位の「歌舞伎」と「思う」は、他の語に比べて出現回数が極端に多いと統計ソフトが判断し、共起ネットワークの図には出てきていない。なお、前処理結果は総抽出語数417, 異なり語数133であった。

表8 KH Coderの共起ネットワークによる分析結果
(中心性)

中心性	教育目標			
	①	②	③	④
かなり高い (ピンク)	師匠		楽しい 合わせる 出来る	文化 練習
高い (白)				日本 好き
やや高い (水色)	お願い		チームワーク 思う 人	歌舞伎クラブ 体験 守る 伝統文化

5) 全体

師匠の教育目標と舞台経験回数の相関についての分析結果

師匠の教育目標の4つの項目の4年間の合計得点と舞台経験回数の4年間の合計得点の間の相関係数を求めた。その結果、この両者間には、有意な相関はみられなかった。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果(中心性)

師匠の教育目標の4つの項目の共起ネットワークの分析結果から読み取れる中心性の高かった語は、表8に示すとおりであった。表8に示す教育目標①の高い、②のかなり高い・高い・やや高い、③の高いにおける空白の部分は、当てはまる語がなかったためである。

3. 児童の主體的学びに関するグループ分けによる分析結果

児童の主體的学びについて播州歌舞伎に取りくんだ期間と学年との関連を検討するために、期間の前半と後半に着目した。まず、3、4年生の2学年間で師匠の教育目標を書いていた人を有グループ、書いていない人を無グループとした。同様に5、6年生の2学年間で師匠の教育目標を書いていた人を有グループ、書いていない人を無グループとした。51人全体を有・有グループ(8人)、有・無グループ(9人)、無・有グループ(11人)、無・無グループ(23人)の4つのグループに分けた。

グループごとに師匠の教育目標の合計得点と舞台経験回数の合計得点を表9に示した。グループごとにその両者間の相関の分析結果、KH Coderの前処理結果、KH Coderの抽出語150の分析結果、KH Coderの共起ネットワークによる分析結果の4つから検討した。抽出語150の分析結果においては、抽出した語が150語に満たなかったために、150語よりも少なくなっているものもある(結果の一覧は省略)。

共起ネットワークの分析においては、師匠の教育目標の分析と同様に分析の基準をそろえた。樋口(2015)が「ごくわずかな回数しか出現していない語は統計的な分析には利用しにくいし、逆にあまり文書数が多い語は一

般的で分析に利用しにくい語であることが多い。よって、多くの場合、これらの語を省いておいた方が分析を行いやすいだろう。」と述べていることから、最少出現数による語の取捨選択を「5」に設定し、描画数を「60」に設定し、「強い共起関係ほど太い線で描画」と「出現数の多い語ほど大きい円で描画」という項目を選択して分析を行った。

1) 有・有グループ

師匠の教育目標と舞台経験回数との相関の分析結果

有・有グループの師匠の教育目標の4年間の合計得点と舞台経験回数の4年間の合計得点の間には相関はみられなかった。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、有・有グループの分析結果は図5に示すとおりであり、前処理結果(総抽出語数4459, 異なり語数565), 使用語数は58であった。

2) 有・無グループ

師匠の教育目標と舞台経験回数との相関の分析結果

有・無グループの師匠の教育目標の4年間の合計得点と舞台経験回数の4年間の合計得点の間には、 $r(9) = .308$ で低い(弱い)相関がみられた。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、有・無グループの分析結果は図6に示すとおりであり、前処理結果(総抽出語数4334, 異なり語数550), 使用語数は47であった。

3) 無・有グループ

師匠の教育目標と舞台経験回数との相関の分析結果

無・有グループの師匠の教育目標の4年間の合計得点と舞台経験回数の4年間の合計得点の間には、 $r(11) = .453$ で中程度の相関がみられた。

KH Coderの共起ネットワークによる分析結果

KH Coderの共起ネットワークによる、無・有グループの分析結果は図7に示すとおりであり、前処理結果

表9 グループごとの舞台経験回数と師匠の教育目標の平均

	有・有グループ		有・無グループ		無・有グループ		無・無グループ	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
舞台経験回数	9.38	2.01	7.67	1.86	6.73	2.12	8.13	2.33
師匠の教育目標	3.75	1.12	1.11	0.34	1.55	0.45	0	0

表10 KH Coderの共起ネットワークによる分析結果(中心性)

中心性	有・有グループ	有・無グループ	無・有グループ	無・無グループ
かなり高い (ピンク)	人 歌舞伎 思う	嬉しい	役 嬉しい 思い出 歌舞伎	ベルディーホール 12月 公演 歌舞伎クラブ 声
高い (白)	間違える		人	緊張 11月
やや高い (水色)	役 終わる 緊張 芸能祭	終わる 舞台	出る 終わる 残る どんどろ大師	練習 思う 姫路

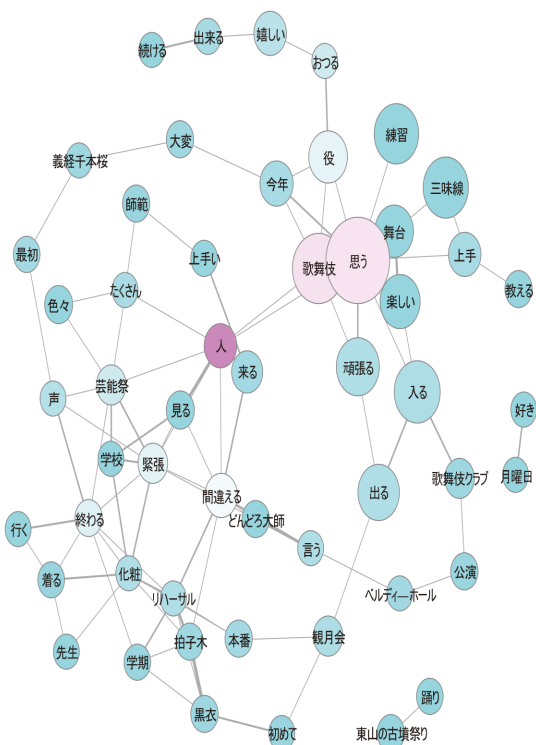


図5 KH Coder の共起ネットワークによる有・有グループの分析結果

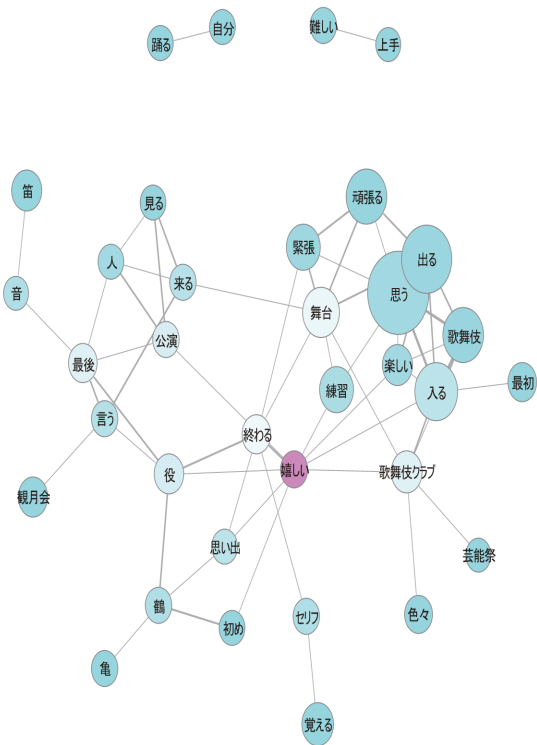


図6 KH Coder の共起ネットワークによる有・無グループの分析結果

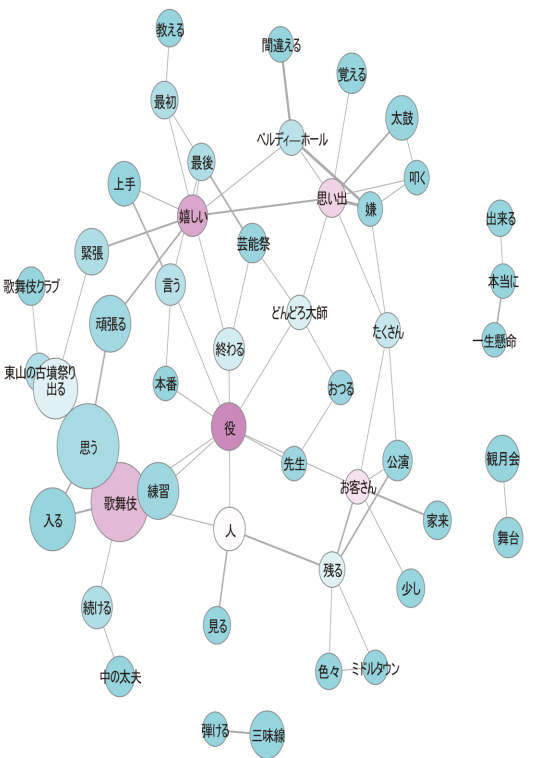


図7 KH Coder の共起ネットワークによる無・有グループの分析結果

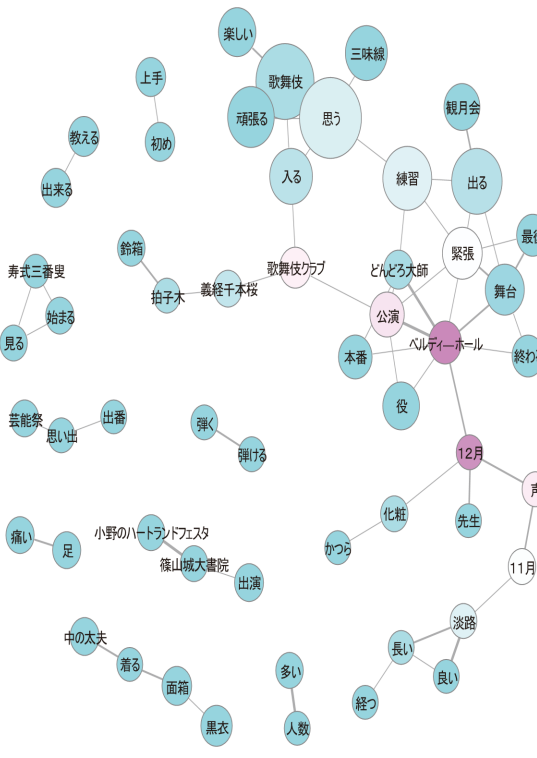


図8 KH Coder の共起ネットワークによる無・無グループの分析結果

(総抽出語数5477, 異なり語数559), 使用語数は62であった。

4) 無・無グループ

師匠の教育目標と舞台経験回数との相関の分析結果
 無・無グループの師匠の教育目標の4年間の合計得点と舞台経験回数の4年間の合計得点の間には相関はみられなかった。

KH Coder の共起ネットワークによる分析結果

KH Coder の共起ネットワークによる, 無・無グループの分析結果は図8に示すとおりであり, 前処理結果(総抽出語数10006, 異なり語数749), 使用語数は100であった。

5) 全体

KH Coder の共起ネットワークによる分析結果(中心性)

児童の主体的学びに関するグループ分けによるグループごとの共起ネットワークの分析結果から読み取れる中心性の高かった語は、表10に示すとおりであった。表10中の有・無グループの高いにおける空白の部分は当てはまる語がなかったためである。

考察

師匠の教育目標と舞台経験回数の相関について

師匠の教育目標と舞台経験回数に高い相関が見られなかったことから、児童にとって舞台に立つことと師匠の教育目標を学び取り文章に記述することとの関連は明らかでないことが示唆された。また、「播州歌舞伎クラブ10周年記念文集」(1998)のなかで師匠が「『練習は本番の如く、本番は練習の如く』と子どもたちに言い聞かせ、練習も本番と同じように大切だと伝えている。」と述べていることから、児童は舞台本番だけでなく、練習を通して師匠の教育目標や播州歌舞伎のおもしろさなど様々なことを学び取ろうとしていたと考えられる。

師匠の教育目標に関する文の有無について

本研究では、児童の主体的学びに焦点をあてて研究を進めてきた。主な結果として、有・有グループ、有・無グループ、無・有グループに属している28人の児童が主体的学びに関する文を記述していたが、無・無グループに属する23人は主体的学びに関する文を記述していないことがわかった。この結果から、師匠の教育目標を学び取り、主体的学びに関する記述ができていたのは、約半数の児童であったことがわかる。このように、約半分の児童しか主体的学びに関する記述が行えていないのは、師匠の教育目標を学び取っても、文に記述できていない児童がいることや、「自分の成長を振り返った内容」、「播州歌舞伎から学んだことをどんなことに活かしていきたいか」などのように、師匠の教育目標の内容には含まれない記述が見られたことが原因であると考えられる。主体的学びの定義を見直すことによって、より多くの児童の播州歌舞伎を通じた成長や師匠が懸命に伝えようとしていた内容が伝わっていたかどうかをとらえることができるので、今後の課題としたい。

記述内容の「人—見る」の共起関係に着目

児童の主体的学びに関するグループ分けによるグループごとの共起ネットワークの分析結果を「人—見る」の共起関係に着目して比べた。これは、問題で挙げた「現代の児童には他者を思いやる心などが欠如している」ということから、「人」という他者を「見る」ことに着目しようと考えたからである。

有・有グループ(図5)では、かなり太い線で結ばれていることから、かなり強い共起関係を結んでいる。また、「人」の中心性が高いことから、このグループの児童は、「人」という他者を中心に作文を書いていたと考えられる。有・無グループ(図6)では、2つ結ぶ線が細くなり、強い共起関係を示していない。無・有グループ(図7)は、有・無グループと比べると若干太い線

ではあるが、有・有グループほどの強い共起関係は示していない。無・無グループ(図8)は、「人」と「見る」という語のどちらもみられないことから、この2つの語に共起関係が全くみられなかった。

以上のことから、主体的学びに関する記述がみられる、有・有グループ、有・無グループ、無・有グループの児童は『「人」という他者を『見る』こと』つまり「他者を意識する」という播州歌舞伎での経験をとおして備えられたのではないかと考えた。そして、「人—見る」の共起関係が強く、他者意識の備わっている児童ほど、師匠を見て今どのようなことを指導しようとしているのかということを考えたり、他者意識が備わっている、または他者を見て集団の中での自己のあり方を考えたりすることを繰り返し行っていく中で、主体的学びへとつながって、師匠の教育目標に関する記述ができたのではないかと考察した。

本研究において見出した播州歌舞伎のよさ、魅力は「人を見て、自ら学ぶ」ということである。客を第一に考え、客とともに成長してきた播州歌舞伎ならではの魅力であると言えるだろう。児童が播州歌舞伎を学ぶ中で、師匠という存在を中心に様々な人から多くのことを学び、成長していた。ここでいう学びは「おしつけ」によるものではなく、「自ら」ということが大きなポイントである。これは、播州歌舞伎にのみ見えることではなく、現代の学校教育でも大切なことだと考えられる。

残された研究課題

今回は師匠の教育目標と社会人基礎力に通ずるものがあると考え、師匠の教育目標を主体的に学んだ状態に焦点を当てて研究を進めたが、本来の児童の学びを十分に把握できなかった。今後の課題として、師匠の教育目標には含まれないが、児童が播州歌舞伎を通して学び取ったことを広く読み取っていく必要があると考える。そのために、主体的学びの定義が妥当であったかを見直し、作文以外に児童へのアンケート調査やインタビューなど異なる視点からの調査が必要であると考えられる。

また、本研究では児童が過去に書いた作文を分析対象とし、同じように1年間を振り返っているような作文で、3年生から6年生までの4学年間にわたるものがなく、このような分析方法となった。しかし、今回の研究を行うにあたって、比較対照できるものがなかったことが課題として挙げられる。播州歌舞伎をすることによって児童にどのような変化が見られたのかを分析していくには、やはり、同じような条件のもとで他の活動と比較する必要があったと考えられる。

引用文献

朝日新聞社(2009). SUNSUN あさひ1月号
教育基本法(平成18年12月22日法律第120号)

<<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO120.html>>
(平成28年1月14日)

経済産業省(2006). 「社会人基礎力」とは

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_

- image.pdf> (平成27年12月22日)
- 中央教育審議会 (2011). 平成23年1月「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申) <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm> (平成28年1月14日)
- 中町 子ども歌舞伎クラブ育成会 <15年間のあゆみ> (2003)
- 播州歌舞伎クラブ10周年記念文集 (1998)
- 樋口耕一 (2015). KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル<<http://khc.sourceforge.net/>> (平成27年6月29日)
- 兵庫県教育委員会 (2011). 心かがやく 心がつむぐ兵庫のきずな 兵庫県版道徳副読本 中学校
- 兵庫県教育委員会 兵庫県道徳教育 web ページ 「作成趣旨等について」 <<http://www.hyogo-c.ed.jp/~gimubo/doutoku/doutokuweb.htm>> (平成27年1月14日)
- 文部科学省 (2009). 平成21年6月「子どもの徳育に関する懇談会 資料2 子どもの徳育に関する懇談会『審議の概要』(素案)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286155.htm> (平成27年11月17日)
- 吉田省三 (1990). 聞書 播州歌舞伎, 41, 47.